

「斜陽」結尾の混乱

——直治の恋人の設定をめぐる——

大森郁之助

I

その発表当時「世間一般の、又、文壇の昂奮は非常なもので（略）」

今日ではこのやうな世間全部の文学的熱狂といふやうなものは、とても考へられない」と、太宰治に対しては終始批判的だったあの三島由紀夫も認める（昭39・4講談社刊『私の遍歴時代』）ほどに、大衆的な受け入れられ方もした「斜陽」（昭22・7、10『新潮』）だが、本質的に短篇作家だったと思われる太宰の長・中篇の例に洩れず、その構成には読者（評者）個々の好き嫌いを越えた欠陥、少なくとも不備が、幾つかあるようだ。その一つは、全八章中の第七章の全文である八直治の遺書Vの後半を占める、「永いこと、秘めに秘めて、戦地にゐても、そのひとの事を思ひつめて、そのひとの夢を見て、目がさめて、泣きべそをかいた事も幾度あつたか知れ」ない、或る「中年の洋画家の奥さん」の設定に端を発する、主要登場人物の、少々大げさにいえば人格の分裂である。

右ハ洋画家の奥さんVは、ハ遺書Vが宛てられた姉かず子「にだけ、遠まはしに、ぼんやり、フィクションみたいにして教へて置」く、とされるのだが、「フィクション、といつても、しかし、姉さんは、きつとすぐその相手のひとは誰だか、お気付きになる筈」の、「フィクシヨ

ンといふよりは、ただ、仮名を用ゐる程度のごまかし」だということだから、謎の女性という程ではない——筈であり、こういう女性を設定した事自体はべつに欠陥というわけではない。直治によれば姉のかず子が「そのひとをご存じの筈」だと云うのだから、どういふ女性か？というよりも誰（既知の人物の中の）か？という方が適当だろうが、その女性の素姓を最も端的かつ無造作に曝け出してしまったのは平野謙「太宰治論」（昭32・12筑摩書房刊『太宰治研究』）Ⅱ（初出不詳、末尾に「昭和二十三年八月」と註記）かと思われる。そこでは、「一体だれのことか？」といった問題提起の形も経ず、自明の事のように、まずそのハ夫Vについて

私の申しあげたかったのは、ここに描かれたデカダンス作家が決して「滅びゆく」一人ではないという事実、おそらく弟直治の「末期の眼」にうつった「田舎者の凶々しき、馬鹿な自信、ずるい商才」こそかえてこの人物の本質にちかひという事実であります。（略）だからこそ、彼は女主人公から（略）一等最後にはマイ・コメディアンと呼ばれなければならなかった。

と、直治の遺書でハ洋画家Vへの評として記された「田舎者……」をそのままハデカダンス作家V——上原——への評と取り做し、

女主人公とその母、その弟と作家という四人に劣らぬ重要人物と

して、私はその作家の妻をあげたいのです。重暎でひつつめ髪に結っている作家の妻のあわれふかい忍従のすがたに、作者は女主人公とはちようどうらはらの祝福を与えていると私は信じます。その妻の無垢な美しさに惹かれることによってかえって弟は滅亡をはやめ、その夫の無頼な敗徳をあげることによってかえって姉は脱出の契機をつかむ、(以下略)

と続けてゆく。「重暎」云々は、直治の遺書で「そのひと」の風貌を姉さんよりも、少し年上です。一重暎で、目尻が吊り上つて、髪にパーマネットなどかけた事が無く、いつも強く、ひつつめ髪、とてもいふのかしら、そんな地味な髪形で、さうして、とても、貧しい服装で、けれどもだらしなない恰好ではなくて、いつもきちんと着付けて、清潔です。(略) その洋画家の行ひは、たいへん乱暴ですさんだものなのに、その奥さんは平気を装つて、いつも優しく微笑んで暮してゐるのです。(傍点引用者)

と紹介しているのを引いたもので、直治は一往洋画家の妻Vの容姿挙措として記したのを平野文では一議に及ばず「……に結っている作家の妻」と呼び換えてしまったのである。

ハフィクションみたいVと自註した直治の持ち出し方と対比すればあつけなすぎる感じもするが、しかし結論自体は異を唱えようのない、従って論証を省略したことも難じにくいものである。——と口の下から、省略された論証を簡単に代行するなら、まず大前提として、△そのひとVは、かず子が「おそらく、逢つた事は無いでせう」がそういう人物の存在は知っている筈(直治の遺書)、とされる。ということは、S・S・ヴァン・ダインやR・A・ノックスの探偵小説タヴー集に△犯人は小説の最初から登場していなくてはならないVとするほど厳格ではなくとも、とにかくこの「斜陽」の中に登場していて、読者にも知られている——厳密に言えばかず子が知っていることが、読

者に知られている人物でなければなるまい。そして勿論、既出(なるべくならば、だが、かず子が以前から知っていたことが次の章に書いてある、というのではやはり不手際だろう)の人物ならば誰でも資格があるわけではなくて、△そのひとVは△仮名Vで示されているのをその描かれ方△風貌や生活ぶり等の類似によって読者が△本名Vに還元するわけだから、還元する先——△本名Vでの風貌・生活等々も、類似性をとらえ得る程度に詳しく、具体的に(当然ながら類似した風貌・生活が)描かれていなければ、無理である。ところで△洋画家の妻Vとして示された△そのひとVの基本的条件は、洋画家の、というのは△仮名Vにしる、とにかく人の妻であること、年齢はかず子(二十九歳)より少し上、そして娘がいる(直治の遺書に「お嬢さんを抱いて」とある)こと、くらいだろうが、ただ類似といつても漠然として捜しようがないからこの辺が基準になろう。

さて、こう整理してみると(整理するまでもないかも知れないが)、例えば、人妻ではあるらしい「この村でたつた一軒の宿屋のおかみさん」のお咲さんも、「三十歳前後」のチドリの中「キヌちゃん」も、チドリのおかみに直治との仲をからかわれている(そういう仲らしい)「私より若いくらいのお嬢さん」のチエちゃんも、それぞれ、せいぜい一項目程度の適合にとどまって候補者に数えるには物足りな過ぎ、考えられるのは直治が戦前から師事し親しく交際していた作家上原二郎の、その妻しかいない。戦前、麻薬中毒になっていた頃、直治は薬屋の支払いの金を上原のアルバイト迄ばあやに届けさせるよう、他家へ嫁いだばかりのかず子に何度も頼んで来ていた(三)から、使いをしたばあやの口を通じて上原の妻の存在が知られているか、とは想像し得た筈である(後述、かず子自身も上原を訪れた事を知った後は姉弟二人であれこれ上原さんの噂などし)たという(三)が、そこで上原の妻も話題になったかとするには、直治の遺書で「姉さんは、ご存じ

かな？」と確信のない言い方をしているのがおかしい。しかし上原の妻にかず子が直接対面するのは、戦前の訪宅の折は妻は不在だったし、戦後、第六章の上原訪問の際は上原が留守で妻と逢うのだが、直治には友達を訪ねると詐って上京したので予想はし難く、その間に直治は山荘で自殺してしまう。遺書で、△そのひと▽に姉さんは△おそらく、逢った事は無かるう▽とするのは、右の事情に照応する。

その上原の妻は既に六年前、金を届けに行つたばあやの口から「そんなに綺麗でもございませぬけれども、お優しくて、よく出来た」「安心してお金をあづける事が出来」るお方で、「六つ七つの女のお子さん」がいる、と報告されていた(三)が、六章でかず子が上原の留守の玄関で向かい合つてみると、「細おもての古風な匂ひのする」、かず子よりも「三つ四つ年上のやうな」女性で、「十二、三歳(年齢は合う)の眼の大きな、めつたに人になつかないやうな感じのほつそりした女のお子さん」もいて、

玄関の暗闇の中でちらと笑ひ、／「どちらさまでせうか。」／
とたづねるその言葉の調子には、なんの悪意も警戒も無かつた。
(略) このひとにだけは、私の恋も、奇妙にうしろめたく思はれた。

とか、切れた下駄の鼻緒を革紐を貫つて繕っている間、

奥さまは、蠟燭をともして玄関に持つて来て下さつたりしながら、
／「あいにく、電球が二つとも切れてしまひまして、(略) 主人
がゐると買つてもらへるんですけど、ゆうべも、をととの晩も
帰つてまゐりませんので、私どもは、これで三晩、無一文の早寝
ですよ。」／などと、しんからのんきさうに笑つておつしや
る。

といった風貌筆措が描かれる。「たしかに珍らしくいいお方」とかず子に感じられるこの上原の妻のイメージは、前引、直治の遺書にいう

△そのひと▽の風貌や、同じく

僕は立ち上つて、／「それでは、おいとま致します。」／その
ひともしち上つて、何の警戒も無く、僕の傍に歩み寄つて、僕の
顔を見上げ、／「なぜ？」／と普通の音声で言ひ、本当に不
審のやうに少し小首をかしげて、しばらく僕の眼を見つづけてゐ
ました。さうして、そのひとの眼に、何の邪心も虚飾も無く、
(略) 二人の顔が一尺くらゐの間隔で、六十秒もそれ以上もとて
もいい気持で、そのひとの瞳を見つめて、それからつい微笑んで
しまつて、／「でも、……」／「すぐ(夫は)帰りますわよ。」
／と、やはり、まじめな顔をして言ひます。

(略)

高貴、とても言つたらいいのかしら。僕の周囲の貴族の中には、
ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人
は、ひとりもゐなかつた事だけは断言できます。

とか、やはりその△洋画家▽の△アパートで朝から酒を飲まされ、酔つ
て、

横になつてうとうとしてゐたら、ふはと毛布がかかり、僕は薄目
をあけて見たら、東京の冬の夕空は水色に澄んで、奥さんはお嬢
さんを抱いてアパートの窓縁に、何事も無ささうにして腰をかけ、
奥さんの端正なプロフィールが、水色の遠い夕空をバックにして、
あのルネッサンスの頃のプロフィールの画のやうにあざやかに輪郭
が区切られ浮んで、僕にそつと毛布をかけて下さつた親切は、そ
れは何の色気でも無く、欲でも無く、ああ、ヒュウマニテイとい
ふ言葉はこんな時にこそ使用されて蘇生する言葉なのではなから
うか、ひとの当然の佗びしい思ひやりとして、ほとんど無意識み
たいになされたもののやうに、絵とそつくりの静かな気配で、遠
くを眺めていらつしやつた。

とかの挙措や人柄の設定と、同趣といつてよからう。少なくとも、これに取って代わることが形式的には可能な程度の詳しい描かれ方をした女性がいないのに、他の候補者との適否比較の結果ではなくて、それ自体の描かれた内容によって不適合とされる程の差違は、かず子の見た上原の妻と直治の遺書の△そのひと▽との間に指摘し得まい。

さらにこまかい事を挙げれば、直治が△そのひと▽に「くるしい恋をしちやつた」のは△洋画家▽の△ア、バ、ト、でであり、戦地にいても思いつめていたというから戦前に溯るわけだが、かず子が前後二度訪れる上原の居宅も、戦前の折は「京橋のカヤノアパート」(三三)、二度目にその妻と逢った荻窪北口下車の「二軒長屋のうちの二軒」は「大戦後の新しいお住居」とされ(六)、符合する、といえ(それ程重大でもないが)いえる。又、直治の遺書に△洋画家▽の本質を知った興奮め(後述)と、反面、「いま死ぬるに当って、(略)なつかしく、もう一度逢つて遊びたい衝動」を記すが、これは六章でチドリのおかみが「この頃、何か上原さんと、まづい事でも(直治に)あつたんぢやないの? いつも、必ず、一緒だつたのに。」と気にしている疎遠(?)と、平仄は合つていよう。

以上、直治の云う△そのひと▽の実体を求めるなら上原の妻と考える他ないことを述べたが、次に、そう考えた場合副産物的に、あの不審この疑問が解消する、という点を挙げておく。

その第一。直治の遺書の次の第八章、前々第六章で体を許した上原への縁切りの手紙に、かず子は「私には、はじめからあなたの人格と責任とかをあてにする気持はありませんでした」とか、あなたの「デカダン生活とやら」とかいった、六章末尾でのかず子の感情や上原との応待には繋がらない、冷淡な言葉を点出させた後に、「あなたの人格のくだらなさを、私はこなひだも或るひとから、さまざま承りま

したが」と書く。これも、読者を豊稜敷に置いた独白ではなくて理解されるべき小説中の表現としては、△或るひと▽及びその上原批判の言が少なくともその存在は本文中に示されていて欲しいが、その△或るひと▽とはかず子と上原の共通の知人で、かず子に対しては上原への批判を△さまざま▽聞かせるような親密さと、機会とを持つ者でなければならぬ。この条件はかつて上原宅へ使いたばあやにも、チドリその他で会った人々にも想定し難く、最も無理がないのは直治である。しかし直治の言行には上原を名指ししての批判は見当らないから、遺書の△洋画家▽への批判がそれであった場合のみ、納得がいく。

もう一つは、同じかず子の手紙の末尾近く、

私はもうあなたに、何もおたのみする気はございませんが、(略)私の生れた子を、たつたいちどでよろしうございますから、あなたの奥さまに抱かせていただきたいのです。さうして、その時、私にかう言はせていただきます。／＼「これは、直治が、或る女のひとに内緒に生ませた子ですの。」／＼なぜ、さうするのか、それだけではどなたにも申し上げられません。いいえ、私自身にも、なぜさうさせていたできたのか、よくわかつてゐないのです。でも、私は、どうしても、さうさせていただかなければならないのです。直治といふあの小さい犠牲者のために、どうしても、さうさせていただかなければならないのです。

と云う。やがてかず子が分娩すべき上原の子を、ただ上原の妻に抱かせるだけなら、「捨てられ、忘れかけられ(上原に)た女の唯一の幽かないやがらせ」として、単純だが判りやすかるう。だが、直治の子と称すれば上原自身は妻の面前で免責されたことになり、通常の単純ないやがらせとしては無意味な細工という以上に意味の減殺である。しかし、本意が△直治……のため▽だということのだから△直治の遺児〓犠

性者が残したさやかな結実Vという詐称はその側からの必要であり、
 へいやがらせVは副次目的乃至擬装（「……いやがらせと思召し、ぜひ
 お聞きいれほど」とある）なので滅殺も止むを得ない、又はへいや
 がらせVの意味が通常と異なるのだとしても、今度は、ことさらに上原
 の妻に抱かせる意味が不明になる。しかし直治の果たせなかつた恋の
 対象が上原の妻だったという条件が加わると、他の女にちゃんと受入
 れられたぞというあてつけ（少々下品だが）にしる、又は、へ直治の
 子Vがその恋人にへ母性の姿態Vを以て抱きとられるという、恋の成
 就の擬態にしる、この形をとった場合にのみ生ずる意味∥効果が考え
 られる。

神西清はこの結末について

見よ、新しい「聖母」のすがたが、満身に斜陽をあびてこの時く
 つきりと地平線に描きだされる。しかもこの「聖母」の胸には、
 ある悲願が秘められてゐる。それは、やがて生まるべき子を、肉
 身の弟直治の哀れな恋の形見と錯覚したといふ、妖しい夢想であ
 る。（略）僕はこの『斜陽』一曲を、もし許されるなら、聖書の
 主題によるヴァリエーションと呼びたいと思ふよ。絵で言へば君
 さしづめあのフラ・アンジェリコだ。あのコルトナ受洗堂の受胎
 告知図だよ。聖母は君、じつは弟直治によつて身ごもつたのだよ。
 なあに上原なんて、ほんの小道具にすぎないのだ。（略）かず子
 はおのれの胎に、ほかならぬわが胎に、血すぢをし、かと思ひ留め
 たのだよ。（『斜陽の問題』、『新潮』昭23・2）

と独自のイメージをうたい上げ、それを引いて伴悦氏は

この（かず子の）夢想の逞しさを、現実の逞しさとして轉移させ
 るためには、上原の奥さんという他者の認知が必要であつた。

（『斜陽論』、昭47・4芳賀書店刊『批評と研究 太宰治』）
 と補説した。しかし、他者に向かつてへ直治の子Vだと言うのはかず

子であつて、それを他者が聞くだけで、或いは聞きつつ抱けば、それ
 で他者による認知になり、現実となるのか。また逆に、かず子の口か
 らへ或る女のひとに内緒にV生ませたと、言うことは、かず子の胎であ
 ることの間接的否定、即ち神聖受胎の二要件の中の一つの否定になる
 うが、その点に関してはず子の詐称の言霊は働かないのだろうか。
 そうした瑕瑾（？）は措いても、それではなぜ、誰でもいい筈の他者
 一般からとくに上原の妻が選ばれ、しかも強くこだわられるのが不
 明である。へ直治の子Vと称する理由づけに於ては神聖受胎説に限り
 ない魅力があるにしろ、一つの行為の或る構成要件のみが説明されも
 う一つの要件は手もつけられないのでは、その行為の解釈として、平
 均して五十点という訣にゆくまい。

確認したいのは、皮肉でなしに神西をさえかく眩惑したかず子の異
 様な申し出が、へ直治の仮名の恋人∥上原の妻Vという認識をしかと
 根付かせることによつて明快に理解される、ということである。

II

ところでさきにも断つたように、本稿表題に『斜陽』……混乱』と
 したのは、この、直治の恋人の設定に於けるへフィクションVそのこ
 と自体ではない。例えば冒頭に引いた平野文の直截さの功はそれとし
 て、結論だけについていうなら誰がどうもたつこうと（たとえば本稿
 のように）そこに辿りつく筈、迷い込みそうな岐路とて無い筈である
 が、それからすると少々妙なのは、多くの「斜陽」論で今もって、こ
 の女性をへ上原の妻Vと本名に引き戻さずに直治の表現のままへ洋画
 家の妻Vで済ませているのを見ることである。へ洋画家Vという仮託
 の人物はへそのひとVを紹介する手順として出て来る、この場面限り
 の呼称なのだから、独立性を保たせておく意味は乏しく、むしろ四大

主役の一人である（前引平野説）上原の人物像に吸収させてしまった方が、その妻Vに対する理解も幅や厚味を増すことになる（上原に關しても同じ）と思われるし、勿論、各論者が「フイクションV」を解けなかったなどということは考えられない。それなのに、である。

思うに、——誰のことかと問いただされれば上原（の妻）以外ではありえないのだが、殊更すんで上原（同）のことだと言いつてるのは釈然としない——そういった感じが、各論者の心底にありはしないだろうか？ 例えば（こういうたとえは一部文化人の鑿鑿を買うかも知れないが）、或る殺人事件の容疑者が証拠不十分で無罪判決をうけた、しかし殺人はあったのだから必ず犯人はいるのであり、彼以外の者は疑いようがないのだから真犯人は彼でしかあり得ないのだが、しかし彼自身に即しては証拠が不十分なのだから犯人とはなし得ない。そういう場合、彼は犯人なのか否かと二者択一で問われれば否と答えざるを得ないが、自分からそれを話題にし、否と告げる機会を進んで作る気には、なれない。——同じように（余り同じようではないかも知れないが）、洋画家の妻という「仮名V」は誰のことか、という問題に論及するとなれば答は決まっているが、それを直接論じようとするのではない場合、わざわざ「これはじつは上原（の妻）」でVと註解する気になれない。そういった気味はないだろうか？

ひとの心底はどうでもよい。私自身に限っていえば、この疑いようもない「本名V」を、しかし必要な場合に言い立て、それに呼び換えるのには、抵抗を感じるふしが無いではない。遺書の中で直治は「洋画家V即ち上原」との交際をかえりみて、

さいしよはその洋画家の作品の特異なタッチと、その底に秘められた熱狂的なパッションに、酔はされたせいでありましたが、（略）いまこそ、感じたままをはつきり言ひますが、ただ大酒飲みで遊び好きの、巧妙な商人なのです。遊ぶ金がほしさに、ただ

出鱈目にカンヴァスに絵具をぬたくつて、流行の勢ひに乗り、もつたい振つて高く売つてゐるのです。（略）おそろくあのひとは、他のひとの絵は、外国人の絵でも日本人の絵でも、なんにもわかつてゐないでせう。おまけに、自分の画いてゐる絵も、何の事やらご自身わかつてゐないでせう。（略）さうして、さらに驚くべき事は、あのひとはご自身のそんな出鱈目に、何の疑ひも、羞恥も、恐怖も、お持ちになつてゐないらしいといふ事です。（略）つまり、あのひとのデカダン生活は、口では何のかのと苦しうな事を言つてゐますけれども、その実は、馬鹿な田舎者が、かねてあこがれの都に出て、かれ自身にも意外なくらゐる成功をしたので有頂天になつて遊びまはつてゐるだけなんです。（略）このひとの放埒には苦惱が無い。むしろ、馬鹿遊びを自慢にしてゐる。ほんものの阿呆の快樂児。

と、よくもこれだけ並べたと思う程の悪口を連ねる。

だが同じ遺書の前の方には「洋画家Vならぬ上原との間で、上原の仕事で得た金で自分の飲み食いの支払いはさせられないと言ひ、その理由を「上原さんのお仕事を尊敬してゐるから、と簡単に言ひ切つてしまつても、ウソで」「ただ、ひとの「ごちそうになるが、そらおそろしい」「殊にも、そのひとご自身の腕一本で得たお金で、ごちそうになるのは」辛く、心苦しいのだ、と説明する。「上原の仕事への尊敬Vは、おごらせ得ない理由としては、全面肯定されていないが、かといつて、まるきり否定されているわけではない。そして「……尊敬V」といふもの自体（の存在）については否定も疑いもとくに示されてはいないのだから、これはむしろ「尊敬V」そのものは自明とした上で、その作用を限定する趣意と解すべきだろう。これはしかし、少しおかしくはないか？ その直後に、姉には「きつとすぐ」氣附かれる筈の「仮名V」で洋画家即ち上原への完膚ない迄の批判（前引）を記すこと

になるのに？……尊敬Vを自明の事として、というのは、いいかえればとくにここで積極的に力説もしていないということなので、或いは、永い間の口癖で、うっかり尊敬しているかのようないまわしになってしまったのか？しかし後文であれだけ堰を切ったように述べ立てる批判を胸に懐きながら、うっかりして、逆の口吻になってしまった、というのは不自然すぎよう。

遺書の前々章第五章で、直治が上原にすすめられ彼を顧問にして出版業を計画する、というのは、本心からの敬愛によらなくても有り得よう。しかし通常は、ということは特に説明が無ければ（ここでは無い）、敬愛の関係を想像させる行為であり、これを含めて、戦前即ち第三章でかず子に「上原さんは、悪徳のひとのやうに世の中から評判されてゐるが、決してそんな人ではないから」と弁解したり、上原に会った後のかず子が上原を褒めると「何だかひどく喜」び、「とてもうれしさうに」その著書を次々と読ませたという直治の上原観が、いつのまにか変わっていた、と思わせる伏線は皆無なのである。遺書で酷評されるA洋画家Vが上原であること自体は動かしようがないが、その一方で、それに劣らぬ明確さで、A洋画家V評はそれまでの上原評とは結びつかぬものではないか。これを上原評として受け入れるには心理的抵抗があり、それに伴ってA洋画家Vの妻を上原の妻としてイメージすることも又然り、ということがありはしないか。

ついて行き難い飛躍は直治の上原評だけでなく、かず子の上原に対する姿勢にも、ある。八章でかず子は、上原の人格のAくだらなさを、AこないだもV/AさまさまV聞いた、と、改めて愕くでもなく詰問しようとも思わない、判りきった事のようにあっさりと言いつつのだが（これが直治の遺書を受けているのだろうことは前に述べた）、しかし、上原との交渉を溯って最も近い時点と考えられる六章末尾では、福井という画家の家で一夜を共にした翌朝の上原は次のように捉

えられている。

部屋が薄明るくなって、私は、傍で眠つてゐるそのひとの寝顔を つくづく眺めた。(略) / 犠牲者の顔。貴い犠牲者。 / 私のひと。私の虹。マイ、チャイルド。にくいひと。ずるいひと。 / この世にまたと無いくらゐに、とても、とても美しい顔のやうに思はれ、恋があらたによみがへつて来たやうで胸がときめき、そのひとの髪を撫でながら、私のはうからキスをした。 / かなしい、かなしい恋の成就。 / 上原さんは、眼をつぶりながら私をお抱きになつて、 / 「ひがんでゐたのさ。僕は百姓の子だから。」 / もうこのひとから離れまい。

その次が直ちに、八章の愛想づかしとなるのである。

かず子の上原に対する感情は六年ぶりに再会した第六章で目まぐるしく変転しているが、変転のきっかけは上原の容姿の老醜化とか、かず子への言葉にこもる愛情の厚薄、扱いの丁重とぞんざいといった事どもである。そうした、いわば表面的・感覚的な好悪で愛憎を三転四転させるこの場合のかず子は、気まぐれ・浅薄とも評せよう（弁護するにしてもその反対には云えまい）から、直治によって相手の人格の本質を論されて目が醒め、肅然となり、人間として最も大切なものに基準を置き直して、最後の判断を下したのだ——とでも解説すれば、教養と人生の指針を求める読書会向きではあろうか。

しかし、もしそういうことであるなら、生き方・愛し方としてどちらが「正しい」かは別として、とにかくかず子にとっては生き方愛し方の根本的な転換であり、その転換が自身の体験・実感に基づくか（直治といえども）からの情報によってなされたという点でも、一つの転換といえよう。そして問題は、こうした転換が、読者を十分納得させるだけの必然性乃至蓋然性（一般的にいえば受け受けた衝撃の大きさ、経過した年月の長さ、等。それらに俟たない特殊な事情があるな

ら、その事情)を説き示されているかどうかだが、答は否だろう。この不自然な転換・飛躍は、その転換・飛躍が生じた事柄の重大性を考えれば、一人格の分裂と云っても過大ではあるまい。

「斜陽」の主要登場人物は、しばしばその身分設定と性行・言動との不釣合が指摘される。かず子及びその母のへ貴族Vらしくなさは、はやくは発表の翌年志賀直哉が「貴族の娘が山だしの女中のやうな言葉を使ふ」と難じ(座談会「作家の態度」(一)、昭23・6『文芸』)、豊島与志雄は「母親にしても、娘の女主人公にしても、小説的に検討すれば、大貴族の人柄としては形が崩れてゐる。(略) 作者は、彼女等を自分から遠く引き離して描くことが出来なかつた」(昭23・10刊八雲書店版太宰治全集十四巻解説)と概括、くだっては三島由紀夫の

作中の貴族とはもちろん作者の寓意で、リアルな貴族でなくともよいわけであるが、小説である以上、そこには多少の「まことらしさ」は必要なわけで、言葉づかひといひ、生活習慣といひ、私の見聞してゐた戦前の旧華族階級とこれほどちがつた描写を見せられては、それだけでイヤ気がさしてしまつた。貴族の娘が、台所を「お勝手」などといふ。「お母さまのお食事のいただき方」などといふ。これは当然、「お母さまの食事の召上り方」でなければならぬ。その母親自身が、何でも敬語さへつけければいいと思つて、自分にも敬語をつけ、／「かず子や、お母さまがいま何をなさつてゐるか、あててごらん」／などといふ。それがしかかも、庭で立小便をしてゐるのである。(『私の遍歴時代』)

といった細説もあり、志賀評に対しては太宰も生前最後の激白「如是我聞」(四) (昭23・7『新潮』)で志賀の「兎」(昭21・9『素直』第一輯)の言葉遣いを引いて(但し「お父様屹度お殺せになれない」――「……お殺せなさいますの?」と誤引)応酬しているもの、志賀にも同種の失当があるから(尤も志賀の方は一個所だが)といつて「斜

陽」のそれが正当化されるわけではない。又、弟直治については第三章所引「夕顔日誌」中の階級闘争批判を、「昭和十四、五年という時期、しかも十七歳前後であつた直治」の視野に階級闘争が入りうる確率はきわめて小さく、(略)このような激しい憎悪を内に含む批判が実際に可能であつたかどうか甚だ疑問」とする、島田昭男氏の指摘(『斜陽』覚え書、昭54・4教育出版センター刊『太宰治』3)がある。

しかしこれらは、その身分・年齢等から想像される一般的なタイプとは異なる、ということ、一般的タイプと異なる個人、いわゆる変り者というのは現実に、そう稀でもなく、存在する。作中人物の場合、それが一般的タイプと異なることに作者が気づかなかつたり、気づいてもそうなつた事情が説述されていなければ作品の欠陥には違いないが、それは機械的に分ければ描かれた事柄の欠陥(非現実的、という)ではなくて描き方の欠陥(必要な説述の欠落、という)であろう。それに対して直治及びかず子の上原観の急転(かず子の方が甚しい)は、その事情・理由が、直治の場合は不明確だがかず子の場合は推察できるようになつており(直治の遺書によるとしか考えられないこと、前述)、しかもその理由づけでは一人の人間の内面の変化として現実味に欠ける(前述)となると、直治の場合より始末が悪かるう。つまりこちらは、推察される間接的に説述されている(されてしまつてい)る)事柄が非現実的なのであるから、現前の本文のへ納得できなさVに對して、それを書けば納得させられる事柄(事情・理由)はあるのだが書かなかつたため(か?)、などという、読者の気持の逃げ道もない。貴族母娘の言葉遣いのへらしくなさV等には残されているかも知れない当否の判断保留の余地(太宰ファンにとつての)も、上原観の不自然さについては、無い、といえよう。

こうした不手際は、いったい何故起きたのだろうか?

作品本文がどう解釈されるか（又は、どのように解釈不能であるか）、に比べて、なぜこう書いたか（意図の考察）ならばまだしも、なぜこんな事になつてしまつた（心ならずも）のかという探索は狭義作品研究の本筋ではないと思うが、しかし今の場合思い合わされてしまふのは、二十二年二月下旬着手、六月末完成といわれる（美知子夫人、昭27・3刊創芸社版『太宰治全集』十四巻後記）「斜陽」執筆の途中で生じた、太宰の身辺の二つの事情であろう。一つは「斜陽」のモデル太田静子さんの懐妊（同年十一月出産）で、四月二日付田中英光宛書簡に「僕もいま死にたいくらゐつらくて、（つい深入りした女なども出来、どうしたらいいのか途方に暮れたりしてゐて）」と、それを知らされた悩みと思われる記事があり、二つにはのち死を共にする山崎富栄さんと識つたのが、これも同じ頃、三月下旬と見られる。

かつて村松定孝氏は、「斜陽」に先立つ「ヴィヨンの妻」（昭22・3『展望』）で太宰が「自己を大谷に擬装させ」「ハツタリでキザで見栄坊な不良詩人、どこから見ても陋劣な存在に迫りや」り、それと対照的にその妻を「『立派な奥さん』として他の登場人物に賛美させ」たことに、美知子夫人への「謝罪」を見とつた（『太宰治の女性観』、『国文学』昭38・4）が、同時に氏は「斜陽」の上原の妻も又「美知子さんを讃えたデータとして（略）その面影をとどめている」と見た。そのように見るならば、「ヴィヨンの妻」の大谷以上に太宰の客観的（表面的）外観——身辺状況、生活ぶり等々に似通っている上原の俗悪な内面の暴露は、より有効適切な謝罪（反面ではひらき直り？）となつた筈である。前年十二月から翌二十二年一月にかけての執筆と思われる（昭21・12・？付太田静子宛書簡）「ヴィヨンの妻」に比して「斜陽」執筆時の太宰は、より一層、△謝罪△を思うに至つたとしても肯ける情況が固まつて行つていた。

更に、太田静子さんの自伝風小説『あはれわが歌』（昭25・11ジープ

社刊）等によれば、二十二年に入って匆々、太田さんに対する太宰の感情が太田さんの日記（のち「斜陽」の素材となる、いわゆる「斜陽日記」）への作家的関心になつて来た——或いは、それが態度に表われ、太田さんにも感じられるようになって来たものようである。これを単純に太田さんへの感情が褪せて来たものとしていいかどうかは、今、速断を要さない。しかしやがて「斜陽」起稿後、実生活の上では太田さんとの関わりを蔽い、却けるように、山崎富栄さんとの関わりが深まつて行ったことは動かし難い事実である。△上原△の陋劣さの暴露と、それによる△かず子△の愛想づかしとは、太田さんに対して、そうした疎隔化の主客を入れ換えて△も△と貴女が捨て去るべき相手だったのだ△と、なだめ賺すことにもならなかつたらうか。むろんこれも、言い遁れ・瞞着であるよりはまず太宰の自責・懺悔だった、と考えたいのだが。

——だがしかし、作者の私生活に関する知識からは右のような臆測がなし得るとしても、作品「斜陽」の本文が、示す上原観急転の心理が了解し難く、それを蔵する人間像が畸形ともいふべきものになつてしまふのは、それとはまた別の問題である。

註1 上原の△仮名△としての△洋画家△とは別にかず子と上原が一夜を明かすのが上原の知り合いの「△ポ画かき」福井の家、という設定は多少紛らわしく、直治が恋したのは福井の妻と思ひ誤らせる恐れもないではない（太宰と太田さんの△原体験△でも洋画家桜井浜江女史宅に泊まつたようだが、それだから、で済むことではなからう）。或いは、上原がこの画家の家を頻繁に利用していたことから直治（恐らく同行した事もある）が上原の△仮名△を思いついた、という、伏線になつてゐるのだから。

2 野原一夫氏「回想 太宰治」（『新潮』昭55・3）によれば、太田さんとの対話で、太田さんが太宰に打明けた時期を「三月の二十日すぎのこと」

と確認している。小笠原克氏は恐らく作品の読みから「太宰が知ったのは、
時期的には『斜陽』第六章稿了前後だろう」とした（『作品論 斜陽』、『国
文学』昭42・11）が、第六章で突如としてかず子が行動的に変わったかと
思うと七章の遺書を経て八章の訣別へと、急展開はするものの、必ずしも
当該章執筆の直前に太田さん懐妊の衝撃を受けたものとは決まらず（前引
創芸社版全集後記によれば三月上旬に一・二章が完成、「四月から六月末
にかけて」三章以降が書かれたという）、しばしば指摘されるとおり五章
の母親の死までは素材となった太田さんの日記が続く為、それに拘束され
て△衝撃▽による新構想の出番が延びた、といった事情も考え合わせねば
なるまい。

（昭61・9・14）